

第2回 小諸市学校再編計画検討懇話会 会議録

令和4年10月14日（金）開催

開催日時 令和4年10月14日(金) 18:30 ~ 19:52

開催場所 小諸市役所 第1、2会議室

出席構成員 川原田雅夫 塚田 直道 清水 信 高橋 拓哉
神津 昌也 依田 勝彦 相原 良男 中澤 隆治
栗林 正直 小山 里恵 山田 雄司 以上11名
(欠席 : 小松 幸夫 鹿取 俊彦
南澤奈々絵 新津伸太郎 以上4名)

事務局 教 育 長 山下千鶴子 総 務 部 長 柳澤 学
教 育 次 長 富岡 昭吾
学校教育課長 黒岩 孝幸 マネジメント推進係長 吉澤 一男
教育総務係長 小林 喜明 学校教育係長 高瀬 龍二
事 務 主 任 瀧川 宜隆 事 務 主 任 竹内 彩

WEB参加 株式会社 ファインコロボレート研究所

1 開会

〈進行：学校教育課長〉

2 協議事項

（会長）

前回に引き続いて第2回の懇話会となります。

皆さんお忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。本日もおおよそ午後8時をめぐりに終了させていただきたいと思っております。よろしく申し上げます。

（1）前回の振り返り

（事務局説明） 別紙1のとおり

（2）変わる教育

「新たな学び」「変わる大学受験と高校受験」「学力テストで計る能力・資質」

長野県教育委員会 学びの改革支援課 教育幹兼高校教育指導係長

廣田 昌彦 様

〈講演〉

（会長）

廣田先生、盛りだくさんの内容でありましたが、時間内にまとめてお話しいただきありがとうございました。

以上のお話の中からこの後、ご質問やご意見をいただきます。教育の内容はそう簡単には頭に入ってこない、言葉だけでは難しいということがありますが、それはお互い様ですので、遠慮なく、疑問に思った点やご自分の意見をいただければありがたいと思っております。

何かご質問ご意見ありましたらお願いいたします。

（構成員）

廣田先生ありがとうございました。私自身も今年、高校に入学した子どもがいます。今日のお話を聞いていく中で、今、子どもがやっていることを照らし合わせ、具体的にイメージできました。だからこんな勉強しているのか、だからこんな質問が来るのか、ということがすごく胸に落ちるお話をお聞きできてありがたいと思えました。

そこで、今、私が子どもから質問を受けたときに困るのが、そのような教育をしていることは知らないのに、ギャップをすごく感じると思うことがあります。企業側として考えたときに、そのような教育をされてきた子どもたちを受け入れていく社会を作っていくかなくてはならないと思っておりますが、そのような準備を大人たちがする場みたいなものは考えられていますでしょうか。

（廣田先生）

とてもいい質問で驚きました。本当に、学校のほうとして、そのようなことを保護者の皆さんや社会に理解していただく努力をしていません。全然足りていない。私もそう思い

ます。今日は痛いところを突かれました。こんなに変わってきているということ、文部科学省も県の教育委員会や学校も、保護者と連絡をとりながらしていかなければいけないと思います。やっていることが全然違います。今日は私にとって市民の皆さんと直接お話できる本当に大切な機会です。高校再編の住民説明会は、この夏に何回もありました。私は説明会に行って、このような話をさせていただきますと、皆さん、このように教育が変わっているのか、ずいぶん違うんだなと思われて帰られていきます。全然お答えにならないですけれども、本当にそのような努力をこれからしていかなければいけないなと反省しました。

(構成員)

廣田先生ありがとうございました。私自身学校教員ですが、やはり子どもの姿を見てもらうのが一番だと思うので、今日の資料の中にもありましたが、学校を核としてのコミュニティが、市民の方が足を運べる場になっていくといいと思っています。

廣田先生に質問ですが、高校入試の話が最後にありました。自分の理解ですと前期選抜のほうは推薦入試的な要素が強く、後期のほうは学力選抜の要素が強いと思っていますが、今の中学1年生が入試を受けるタイミングから前期選抜のほうにも学力検査が入ってきたり、後期選抜のほうにも面接が入ったりということで、前期と後期、推薦と学力検査というそれぞれの色が失われる印象がありますが、このような形を新しく取り始めるに至った経緯をぜひ伺いたいです。

(会長)

ほかに高校入試に関係して、ご質問ご意見ありますか。

(構成員)

今、新型コロナウイルス感染等で入試の際に面接が全員できない時には、面接シートがあります。そのシートには課題があって、例えば今、多様性などを考えると十人十色でみんな違うと思いますが、そのような形なのか、例えばAならAの課題の中の探究の問題なのか、そのあたりはどうでしょうか。

(廣田先生)

まず、最初の質問ですが、ご指摘のとおりだと思います。よほど注意しないと同じような選抜が二回になってしまう。アドミッションポリシーといいますけど、どのような生徒を受け入れるかというメッセージを高校がはっきりと示していくことになると思います。そういう生徒たちを採るのは前期試験で、学力にウエイトをおいた入試が後期試験といったすみわけを、高校のほうでよほど注意していかないと、構成員ご指摘のような同じような入試になってしまう。これは学びの改革支援課も注視していかなければならないと思っています。

次に面接の話ですが、実際にご指摘のように、「これまでどのような学びをしてきましたか」「学校は好きですか」「これからどんな夢を持っていますか」というような種類のものを書かせる面接シートもありますし、あるいは国際課のような学校では英語の試験を

したり、小論文を書かせるなど、面接シート代わりに科目試験になるような、問題を解かせるようなものを両方用意しています。

ただし、多くの学校では、先ほど私が申し上げたような高校生活はどんなことを期待しているか、夢は何かといったものを聞いて、その生徒のやる気や主体性などを見るシートを多くの学校で採用することになると思います。

(構成員)

廣田先生ありがとうございました。新しい学びの方向というところは私達にも理解できるのですが、この理念を実現するため、つまりソフト面では理解できるのですが、これからの問題として、新しい学校、ハードの面で学びのスペースやその場について、この理念を実現するためには、これからどのようなことに配慮すればいいのでしょうか。まだ早い問題だと思うのですが、いいアドバイスをいただければありがたいと思います。

(廣田先生)

これまでの校舎は、同じ大きさの教室がいっぱい並んでいます。校舎が古くなってきて、おそらく小諸市でも新しい小学校、中学校をつくっていくときには新しい校舎を建てることになると思います。県では、NSD プロジェクト、Nは長野、Sはスクール、Dはデザインで、長野 school Design Project といまして、小諸市に新しい高校ができます。その高校の校舎をどのように建てるかというのを、いろいろな設計会社に発注して、コンペティションをしました。新しい教育がどういう方向に向かっているかという話をして、それを理解した設計者から 50 くらいでできました。そこから五つくらい選ぶことができ、私はそれを見ましたけれども、全然違います。小諸新校、小諸高校と小諸商業高校が合併するとこのような校舎ができるといった話を県の教育委員会が示したら、みんな賛成したと思うくらい素晴らしいです。

何が素晴らしいかというと、すごい大きなスペースもあったり、ちょっとした開いたスペースのところにソファが置いてあって話し合うことができたり、2人だけで話し合うことができたり、ありとあらゆる大きさのスペースがその校舎には作ってあります。大きな話をする、私はその設計書を見たときに涙が出そうになりました。

こんなに楽しくて夢のある高校ができるのかと。決まった学びではなくて、いろいろなところで探究できるようなそういうスペースが、新しい学校にはあります。まさにおっしゃるように新しい学びを実践していくためには、そのような施設を作っていかなければいけないと思いますので、小諸市の皆さんもがんばっていただきたいと思います。

(会長)

ほかにいかがでしょうか。

なければ私から一つだけお聞きしてよろしいですか。

昔に教員の経験をしてきたものとしていつも思っているのですが、新しい学び、新しい教育について、確かにそういう部分も大事だろうと思いますが、今までの学校の教育が全部変わるわけではないと思います。私達のときから、今も続いていると思いますが、1回の授業を大事にしています。大体 45 分とか 50 分で限られています。その時間を、最初は

どのような場面でどのような子どもたちの興味をもってきて場面設定をするか。それから様子を実践させます。個人追求したりグループ追求をしたり全体追求したり、何かを気付かせたり、そういう活動をとおして、こういうことわからせたり。いわゆる問題解決的な学習と言っていましたが、高校もそうだったと思います。

何百年、何十年も前からの教育がガラッと変わるわけではないと私は思います。

今までのいいところはいいところとして、さらに今後の新しい、ICT化とかいろいろありますが、そのようなことをかみ合わせながら、今日お話ししていただいたようなことを、できるところから含めていく。教育がガラッと変わるなんて言ったら、それこそ皆大丈夫かと思えますし、びっくりします。

私の個人的な感想ですが、廣田先生いかがでしょうか。

(廣田先生)

そうですね。今はこのような議論になっていますけど、これまでの先輩方の授業の積み重ねの上にこれが来ていると思います。

授業をどのように構成しているか、特に県の先生方は本当に熱心にそのような部分について研究されてきていると思います。今は主体的・対話的で深い学びということになっていますけれども、やはりこれまでの積み重ねの上にどのように応用されているかということが主に議論されていると思います。

ですので、高校よりも義務のほうはずっと進んでいます。高校はそういった授業の作り方がややおざなりになって、学生に任せてきたところがある。かえって高校のほう新しい風を受けて変わっていていることもあるかもしれませんが、特に小学校中学校のその義務の学びというのはこれまでの基盤の上に立っているものだと思っています。

(会長)

はい、ありがとうございました。時間も来ましたので最後にお一人、ご質問ご意見がありましたらどうぞ。

(構成員)

学校現場のお話をしたいと思います。学習指導要領が変わるときは、今までは学ぶ中身が大きく変わってきていました。ところが今回の学習指導要領の大きな観点は、学び方が示されたということです。

先ほど廣田先生のお話がありましたけど、主体的・対話的で深い学びの授業をしましょうということで、初めてのことでしたので、現場は大きく混乱しました。小学校ではほとんど定着しておりますけれども、深い学びとは何だということで、先生方は本当にクエスチョンマークだらけでした。

ですが、校長研修会とか研究会で大学の先生方のお話を何度も聞きましたが、信州で行ってきた教育は何も変わらない。昔からこれを行っているので自信を持ってくださいという先生方がほとんどでしたし、私は社会科ですけれども、社会科の研究会ではずっとこのような授業をやってきました。ですから、何も変わらなくていいと私は思っています。

今一番先生方が困っているのは実は ICT です。特にベテランの先生方が難しいのではないかと抵抗感を示しています。ただ、振り返ってみると、私が教員になったころにはワードプロセッサが出てきました。その次にパソコンが一般化しています。

最初はすごい抵抗感がありましたけど、今は普通に使っています。それと同じではないかと思えます。やはりやってみる、使ってみる。

そのところをいかに学校の中で進めていくかというところが大きな課題だと思っています。そのように今現場ではやっているところです。

(3) その他

(会長)

はい、ありがとうございました。

では時間も迫っていますので、今日は終わりにしたいと思います。事務局のほうからなにかありましたらお願いします。

(事務局)

ありがとうございました。

次回のアナウンスをさせていただきたいと思います。次回は 10 月 25 日の火曜日、午後 6 時半からとなりますので、出席できない場合はご連絡をいただければ大変助かります。よろしくお願いします。先ほど来お話があるとおり、今回は実際に社会で活躍されている方のお話をお聞きしながら、こういった学びが変わってきた、その先、どのような人材を求めているのか、そのようなことをお話いただく予定となっておりますので、ぜひご参加いただければと思います。よろしくお願いいたします。

(会長)

廣田先生、本日は本当に貴重なご講演をいただきまして、ありがとうございました。

また、スムーズな進行、ご意見ご質問をだしていただきありがとうございました。

以上で本日の協議は終了といたします。

3 閉会

〈進行：学校教育課長〉